

市民百景

第22回

意識し始めたエンドマーク

「生ききる」ことを大切に

小説家（釜石応援ふるさと大使）

柚月裕子さん



1968年釜石市出身。2008年『臨床真理』で第7回「このミステリーがすごい!」大賞を受賞しデビュー。13年『検事の本懐』で第15回大藪春彦賞を受賞。16年『孤狼の血』で第69回日本推理作家協会賞（長編及び連作短編部門）を受賞、第154回直木賞候補。『逃亡者は北へ向かう』が第173回直木賞候補。

本市出身で「釜石応援ふるさと大使」も務める小説家の柚月裕子さんが、9月7日に釜石市民ホール TETTO で開かれた岩手県立病院医学会総会で特別講演を行いました。この講演は「エンドマークの打ち方」と題され、柚月さんの人生観が語られました。「両親を震災で亡くし、年齢を重ねていく中で人生のエンドマークを意識するようになった。震災までは『生きる』ことが大切だと思っていたが、震災を経験してからは『生ききる』ことが大切だと思うようになった。『生ききる』という言葉にはエンドマークを見据えた中でどうしたら悔いなく生きれるかということが入っていると思う。そういう風な心持ちで望んでいると日々のモチベーションが変わる」と語りました。

また、今年の直木賞候補にノミネートされた作品『逃亡者は北へ向かう』の執筆の背景に釜石が関わっていることも話題に挙げられました。「震災直後から、震災を題材にした作品を書くかと思っていましたが、中々書けずにいた。そんな中、震災から8年ほどが過ぎ、

釜石を訪れた際にたまたま成人式が開催されていて、晴れ着姿の若者たちが笑い合っている姿を見て、ものすごく胸を打たれた。そこから作品の構成を練り直し、書き上げた」と振り返りました。講演は時折笑いが湧きあがり、終始和やかな雰囲気で行われ、終了時には拍手喝采に包まれました。

講演後に行われたサイン会では、70人以上のファンが列を成し「頑張ってください」「いつも応援してます」などの激励の言葉をかけると、柚月さんは丁寧に応じながら、故郷に想いを寄せました。



地元のファンと目を合わせて対話する柚月さん

